

ホルモン

Q&A

Q₁

子宮内膜症と心血管系疾患の 関係について教えてください。

〈回答〉 福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター教授 高橋 俊文
福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センターセンター長 水沼 英樹

A₁

子宮内膜症は性成熟期女性の約 10%に認められ¹⁾、思春期から性成熟期にかけては骨盤痛、月経困難、不妊症の原因となり、閉経期以後も卵巣がん(特に明細胞がん)の発生母地となることから、女性の生涯にわたっての quality of life を損ねる疾患として捉えることが必要である。子宮内膜症はエストロゲン依存性に増悪する疾患であるが、子宮内膜症の進展には種々のサイトカインが関与し病変局所では炎症反応が起きていることが数多く報告されている²⁾。近年、子宮内膜症病変局所の炎症反応は全身性に影響を与えることが報告され、動脈硬化などの心血管系疾患との関係が注目されている³⁾。

脂質異常症が動脈硬化を促進するのはよく知られた事実であるが、子宮内膜症患者の脂質プロファイルを検討した研究では、子宮内膜症患者は子宮内膜症でないコントロールと比べ、有意に中性脂肪および低比重リポ蛋白質(low density lipoprotein ; LDL) コレステロールの増加と高比重リポ蛋白質(high density lipoprotein ; HDL) コレステロールの低下が認められた⁴⁾⁵⁾。この子宮内膜症患者で認められた脂質異常は子宮内膜症の重症度と関連していた。すなわち、米国生殖医学会(American Society for Reproductive Medicine ; ASRM)の子宮内膜症の腹腔鏡下での重症度分類(rASRM 分類)で、stage I ~ II の患者と比べ stage III ~ IV の患者では脂質異常の程度が重度であった⁵⁾。また、酸化 LDL は血管内皮細胞傷害の直接的な原因となり動脈硬化を惹起する。Paraoxonase-1 は酸化 LDL の産生を予防する酵素であり、この paraoxonase-1 活性は冠動脈疾患の予測因子として知られている。子宮内膜症患者の paraoxonase-1 活性はコントロールと比べ有意に低下していた⁵⁾。さらに、血管内皮機能の評価方法として血流依存性血管拡張反応(flow mediated dilation ; FMD)があるが、子宮内膜症患者はコントロールと比べ有意に低下していた⁶⁾。この結果は子宮内膜症患者では血管内皮障害が起きている可能性を示唆するものである。これらの研究はいずれもケースコントロールスタディでありそのエビデンスレベルは低いが、子宮内膜症と動脈硬化および動脈硬化を原因とする心血管系疾患を関連づける証左である。